

町長ひとくごと

(29)

齊藤 讓

この春、会社勤めとなった娘が、女房と何やらヒソヒソ話しをしていた。私は、少し離れたところで新聞を読んでいたのであるが、二人のこんな会話が聞こえてきた。

「あのネ、私のところの部長さんはネ、いつもニコニコしていて、今まで一度も人を叱ったり、大きい声をたてたりしたことはないんだって。すっごくやさしい人なんだよ。そしてネ、甘いものが大好きなんだって。うちのお父さんも、あんな素敵な人だったらよかったのにネ。」

「ソォー、そんなにやさしい人なの。いいわネエ。」
思わず、新聞を持つ手に力が入って、新聞がカサカサと小刻みに振るえ、読んでいる活字がぼやけてきた。血が頭へ頭へと上り、コメカミのあたりがヒクヒクと動くのがわかった。いつもなら、「何だと!」

もう一度言ってみろ。」と出る
ところであるが、娘が折角楽しそうに職場の様子を語っていることを考え、必死に堪えた。しかし、なかなか興奮は収まらなかった。大の男が、いつもニコニコしているとは、一体どういうことなんだ。人間であれば、四六時中いい顔ばかりしていられるものではない。もし、そんな者がいたとしたら、それはお地藏さまか、郁郁の阿呆だ。おまけに甘いものが大好きだなんて、まるで女みたいじゃないか。こっちは、自他共に内づらが悪いことで通っているし、自慢じゃないが、生まれてこの方、辛口一本槍で通ってきているんだ。男が、ニコニコしながら大福餅を食っている姿なんか、気味が悪くって見ていられるかい。尤も、辛口の過ぎた時の自分の姿も、あまり格好よくはない。

親父の心

いのだが。それにしても、女房も女房である。「いいわネエ」とは何だ。しかも、さも羨ましいというような声を出したりして。すくなくとも母親なのだから、「いいわネエ」などという物欲しげな言葉ではなく、せめて「いい人でよかったわネエ」ぐらいの相槌が打てないものか。全くデリカシイに欠ける女だ。大体、飼っている犬でさえ、喜怒哀楽の感情を現わすからかわい

いのであって、無表情で木偶の坊みたいな犬なんか、かわいどころか、まるで粗大ゴミと同じではないか。そんなに、やさしいのがいいというなら、ぬいぐるみのニコニコ人形でも側におけばいいだろう。私は、自分に都合のよい内づらの本音を、このように熱立つ腹の中で吐いていた。ことによると、女房や娘の一言も、本音であったのかもしれない。

無論、やさしい部長さんには、感謝こそすれ、いささかの恨みなどあろうはずはない。暫くすると、何と子供じみたたわいのないことを考えていたものだという気がして、思わずひとりで笑い出してしまった。二人が、キョトンとした顔をこちらに向けた。多謝。ところで、町内のある職場に、一人の愉快な男がいる。彼は何事も意気に感ずる男でいつも部下の先頭にたつて遅くまで仕事に取り組んでいる。部下の面倒もよくみるようである。彼は、仕事にも熱心であるが、酒もまた好きである。酒が入ると、忽ちに意気は天を突く勢いとなり、うかつには側に寄せたものではない。部下は言うに及ばず、私なども出逢った時はよく発破をかけられることがある。愛すべき男であるが、どうも家庭のことは無頓着で、奥さんに任せきりのようであり、彼の口から家庭のことをあまり聞いたことがない。もつとも、私とて、他人のことを言える立場ではないが。その彼が、三月上旬のある日、満面に笑を浮べて語りかけてきた。

「町長、私の伴も、お蔭様で希望する高校に入学できました。ホッとしましたよ。みんなから、親父の種ではあるまいなどとひやかされていきますよ。俺も伴に、今度は大学をめざして頑張れと励ましてやりましたよ。」
親父、親父と職場のみんなから慕われ、仕事一途に燃える彼の、不慮みせたことのない心の奥を覗いた気がして、わがことのようにうれしかった。人は誰でも、家から一歩外へ出れば、無意識の中に社会に向けた顔をつくる。人の心や表情は、多面であり、そして奥が深い。だから、一瞬や一面だけをとらえて人を判断すると、真の評価を誤ることにもなる。いづれにしろ、他人との出逢いや係りあいには、責める心ではなく、許すという仏心で臨みたいものだ。